令和５年　１２月１日
東京都立小平特別支援学校
校長　阿部　智子

学校だより

肢体不自由教育部門　〒187-0035　小平市小川西町 2-33-1　TEL　042-342-1671
病弱教育部門・武蔵分教室　〒187-0031　小平市小川東町 4－1－1　国立精神・神経医療研究センター病院内
TEL 042-344-4537

「今年もあとひと月、さあ、何を始めようか…。」

１１月も終盤、１２月を迎えようとしているにもかかわらず、学校の前のイチョウの木はまだ緑色でした。あとひと月、年末に向けて一気に寒くなり、イチョウの葉は、黄色く色付き、あっという間に落葉していくのかと思います。季節の移り変わりが突然で、朝昼晩の気温差も激しく、体調が付いていかない、衣服の調節が難しいと感じます。コロナやインフルエンザ等の感染症への対策は油断せずに丁寧に行いながら、児童・生徒がしっかりと１年のまとめを行っていけるよう学校運営を安全・安心に進めてまいります。

【小平ビブリオ開催しました】

学校だより１１月号でお知らせした「小平ビブリオ」は、動画視聴・メッセージカード作成期間が**１１月２７日（月）から１２月１５日（金）の１５日間に延長されました。**玄関前の図書コーナーのレイアウトが少し変わっています。

「小平ビブリオ」は、本を通しての全校児童・生徒のコミュニケーションの会とするために、動画と POP を使って３分間で発表する本校独自のルールを作りました。作成した動画と POP を各学部でそれぞれ視聴できるようにして、図書コーナーに設置した質問用、感想用の掲示板で、カードを使った児童・生徒同士のやり取りをします。学校全体で、どの本が読みたくなったのかを考えて意見を出していくシステムです。絵本あり小説ありで、「大人も参考になるなあ」と、本を手に取ってみたくなりました。

【高等部の授業づくりから思うこと】

高等部の知的代替教育課程「国語」の授業で故事成語をいかに身近なものとして取り組めばよいだろうか、という相談を受けました。故事成語とは**『この話は「矛盾」だらけだ。（つじつまの合わないこと）』『「蛇足」ですけど…。（不要なもの・余計な行為や行動）』**というように中国の古典に由来する昔の出来事を逸話にした、教訓や真理、教えのことです。現代でも日常の会話や文章で見掛けますし、四字熟語としてよく使われているものもあります。

「なぜこのような漢字の熟語で、そのような意味になるのか？」大人には、常識としてわかっていることでも、子供たちは、聞いたことはあるけれど、記憶の中ではザックリとしていて細かい意味や使い方を知らない場合が多いです。言葉というものは時代によって使い方や意味まで変化していくものですが、変わらずにしっかりと根付いている日本語の大切さ、その根拠を丁寧に学習していくことはたいへん重要です。どういった言葉で、何を学習の中心課題とするのか。ゲームやカードやアプリを取り入れた学習と、しっかりと顔を見て伝えていく言葉での学習を使い分けながら、人工知能(AI)に負けないように、我々教員の授業力を高めていかなければならないと思います。

【集中して考える】

四字熟語の話では、昨年度１０月の学校だよりで将棋の全８タイトル独占を果たした藤井聡太八冠の**「雲外蒼天（うんがいそうてん）…経験や頑張りの次に見えてくるもの」**の話を書きました。当時１９歳であった藤井聡太さんは**雲外蒼天**と揮毫(きごう…毛筆で文字を書くこと)したことについて「強くなることで、盤上において今まで見えていなかった新しい景色がみえてくるかなと思うので、それを目指していきたい」と述べていました。

結果そのものを目指すのではなくて、自分が自分なりに強くなることで、一段高みに上ると見えてくる景色が今までのものとは違うだろう、そこを目指すのだと１９歳の藤井さんは話をしていたのです。

１１月１２日竜王防衛を果たした２１歳の藤井八冠は、**「盤上没我（ばんじょうぼつが）」**と色紙に書いたと報道されていました。**「盤上に没頭してすごく集中して考える。その感覚を大事にしていけたら。」**と説明しています。中盤

で適切な判断ができなかったから、と自己分析をしている藤井八冠の話を聞き、私は、自分の仕事に全く迷いなく、徹底的に先読みをしていける感覚をそこまで研ぎ澄まし、持ち続けていられるだろうかと思いました。そしてこの四字熟語から藤井八冠の仕事への強い思いを感じました。たった４文字ですが、言葉の重みを考えさせられました。

人から発せられる言葉をどのように受け入れ、どう解釈していくのか。人によって受け取り方や感じ方は異なるので、言葉というものは実のところ難しいなあと思うことが多いです。直接、言語として表出することが難しくても、学齢期、着実に年齢を重ねて、経験を積み、言葉を受け取り、受け入れることで、子供たちの体内に言葉は満ちて育っていきます。「今日はどの言葉を教えよう。明日はこの言葉を伝えたい。」と、教師は、次の一手、その次の一手を集中して考えながら、毎日の授業という仕事に没頭していかなくてはなりません。２１歳の藤井八冠の４文字から目の前の仕事への取り組み方を改めて考えさせられました。

【先輩の体験を聴く会での出会いを大切にしてほしい】

１１月２８日(火)、肢体不自由教育部門では「先輩の体験を聴く会」で、沖ワークウェル株式会社に勤める令和２年度の卒業生を講師にお招きし、生徒に向けて「学校生活」「社会人生活」「進路選択」「将来の夢」をキーワードに講演をしていただきました。授業の様子や、文化祭での劇発表で覚えたセリフのこと、ハンドサッカーで頑張っていたこと、進路選択に向けて取り組んでいたこと、そして今現在の仕事について等、笑顔で堂々と話をしてくださいました。コロナウイルス感染症で学校に登校できなくなる直前に卒業式を迎え、世の中が不安でいっぱいな時に、努力して巡り合った自分の仕事の内容を、わかりやすく丁寧に、後輩に伝えてくれました。ロールモデルとして先輩から後輩へと小平 PRIDE をつなげていくことが、後輩の進路選択への一歩となります。先輩！どうもありがとうございました。

【ふれる・もつ・かんじる展の取組みを振り返る・１１月２６日(日)から１２月２日(土)まで】

「ふれる・もつ・かんじる」展というのは、平成２２年から東京学芸大学の金子亨先生の洋画研究室の卒業生が武蔵分教室に勤務したのを機縁として、金子先生、洋画研究室の学生が、武蔵分教室の児童・生徒と始めた造形活動がもととなっています。その後、小平特別支援学校だけではなく、清瀬、小金井、田無、東久留米と都立特別支援学校も加わり、金子先生の御退職後、洋画研究室を引き継がれた花澤洋太先生と研究室の学生が中心となり、東京学芸大学との活動が広がってきたという経緯があります。

コロナ前は、授業実践ワークショップや交流会、地域の方々との造形活動のワークショップなども行っていて、活動は、広がり、深まりを見せていました。

この活動の特色は、東京学芸大学の特別支援関係の学生、教員から始まった活動ではなく、美術を専門とする学生、教員によっていたということだと東京学芸大学学長の國分充先生は「学長だより」で記されています。活動し参加する人間の広がり、活動の総じての展望というものも出てきたと述べられています。

特別支援を専門としない、美術の専門の学生と美術作品を作るという目線で、出前授業に来てもらいながら作品を作ることの楽しさを皆で味わえるようになってきました。そして、今年度は、コロナ禍でできなかった東京学芸大学芸術館でのワークショップへの参加がやっとできるようになりました。武蔵分教室の病弱教育部門の児童・生徒が「ふれる・もつ・かんじる展」の鑑賞に校外学習に行けるようになったのは４年ぶりです。図書館などの大学構内見学も行います。

初日の２６日(日)に会場にうかがった私は、肢体不自由教育部門の生徒が御家族でワークショップに参加していただいているところに一緒になりました。美術作品を自分なりに作ってみる、学生さんと話して作ってみる。芸術の奥深さを集中して考えるのは、芸術の秋にふさわしい、ゆったりとした時間だと思いました。

校長　阿部　智子